千葉大学医学部135周年記念誌

伊藤　晴夫

私が附属病院長を務めさせて頂きましたのは平成13年４月から15年３月までででした。この時期は，国立大学が法人化する直前にあたり，各大学および文部科学省は慌ただしく準備に追われていたという状況でした。このため，国立大学附属病院長会議（以下，国立大学病院長会議あるいは病院長会議）はてんてこ舞いの忙しさでした。なお，同会議の常置委員長（本会議代表）は千葉大学病院長が務めています。副委員長は東大病院長と医科歯科大学病院長ですので，千葉大学が大きな位置を占めていることが分かると思います。一時，大学の法人化を迎えて，これを変える動きもあったようですが，その後もこの体制が続いていることは，病院長は大変ですが，千葉大学にとっては良いことだと思います。

この時期にあたり，今後進むべき方向がはっきりしないために全国の国立大学病院が困らないようにということで，各大学がどのように対処するべきかを示す指針ないしガイドラインを病院長会議で纏めることになりました。これが３冊になったと思いますが，私は常置委員長を務めておりましたので，この点でも大変でした。それぞれは，病院長会議内の各委員会で作成したわけですが，常置委員長はすべての会議に参加しなければならず多忙を極めました。

国立大学病院長会議で作成した最初の指針ないしガイドラインは，平成13年12月に発行した「国立大学附属病院卒後臨床研修必修化へ向けての指針」でした。臨床研修の必修化に伴う諸問題について検討し，各大学病院において研修を充実するために今後取り組んでいただきたい事項を提示しました。次は，平成14年３月に出版した「国立大学附属病院の医療提供機能強化を目指したマネジメント改革について」でした。これは，国立大学附属病院のマネジメントシステム，特に医療提供機能に関するマネジメント改革について検討したもので，真に国民のためになる医療提供機能を充実・発展させるための改善方法を提言しております。３冊目は，「国立大学法人化後の国立大学附属病院の運営について」でした。ここでは，法人化後の国立大学附属病院がその役割と使命を果たすために配すべき財務会計制度及び人事制度上の諸課題について，国及び各大学に対する要望事項としてとりまとめました。これらの指針ないしガイドラインは各大学が法人化に対処するに当たり大いに参考になったと聞いております。

病院長会議の常置委員長として，全国の大学の代表として陳情に行ったことも思い出されます。平成13年７月には文部科学省，財務省，総務省，人事院に行きました。陳情項目は，教職員の増員（医系教官，看護職員，医療技術職員，医員及び医員（研修医）の定数増，教職員の待遇改善について（医系教官（臨床系），看護職員，医療技術職員），中央診療施設の新設・整備（リハビリテーション部，光学医療診療部，病理部，周産母子センター，医療情報部，血液浄化療法部），施設・設備等の充実（建物整備の推進，医療機器等の整備・充実）でした。14年７月には，再び文部科学省，厚生労働省，財務省，総務省，人事院に陳情しています。このときの陳情項目は，卒後臨床研修の必修化について，社会精神医学教育研究センター（千葉大学では社会精神保健教育研究センターとして実現）の設立について，医療保険制度改革について，医歯系教官（臨床系）の増員と待遇改善について，医員の定数増について，中央診療施設の新設・整備について，施設・設備等の充実についてでした。昨今議論の多い官僚支配について，はだで実感したことを思い出します。どっしりした建物，見事なピラミット様の組織，完璧に理論付けされているように見える答弁・説明などでした。

病院長会議の常置委員会の下の広報問題検討小委員会（委員長は大阪大学病院長）で「フォーラム国立大学病院」を発行することになりました。これは，国立大学病院は経営がなっていない，医療事故が多発しているなどの芳しくない印象を持たれていることが多いので，国立大学病院もその存在価値をアッピールしてゆくために年２－３回の発行をしてゆこうという趣旨でした。創刊号が平成14年７月15日に発刊されました。その第１，２面に千葉大学，京都大学，東京医科歯科大学の病院長による鼎談が掲載されました。このフォーラムは現在でもさらに充実して続いているものと思います。

上記と同じ趣旨の下に開催した，「国立大学病院長会議常置委員会と論説委員等との懇談会」は記憶

に残るものでした。平成14年８月９日に，都市センターホテルで常置委員会と各新聞社・NHKの論説委員・解説委員との懇談がおこなわれました。国立大学病院は，国立大学法人化問題，医療制度改革，卒後臨床研修必修化問題などのほか，マネジメント改革の推進という大きな問題を抱え，各大学とも鋭意努力していることを説明しました。論説委員・解説委員からは種々の意見を頂くとともに，数々の問題点を討議でき有意義な会でありました。

千葉大学病院関係では，皆様のご協力により多くの改革を成し遂げることが出来たことは幸いでした。平成13年４月には，総合診療部が設置されました。これは，全人的医療としての初期診療・総合診療とその臨床教育の推進を図ることを目的に設置されたものです。平成14年２月には，院内措置で安全管理室を設置することが出来ました。この設置の目的は，医療事故防止及び医療の安全管理に関する諸問題を具体的に検討し，医療の安全性の向上を図ることでした。これは現在の医療安全管理部です。同年３月には，地域医療連携室を設置することが出来ました。これは，現在の地域医療連携部です。患者及び家族等に対する医療相談等の医療サービスを行うとともに，地域の医療機関との密接な連携を図り，患者に専門的かつ質の高い医療を提供することを目的に設置されました。私ごとですが，姉が千葉大学病院に入院させていただき，その後他院へ転院したときには，ここの社会福祉士のかたには大変お世話になりました。

平成14年４月には，感染症管理治療部を設置いたしました。設置の目的は，院内感染予防対策，難治性感染症の治療，新興・再興・輸入感染症動向の把握及び地域への情報発信，生物テロへの対応，等感染症に関することに対応することでした。感染症管理治療部は，新型インフルエンザをはじめ積極的に活躍していることは皆様ご承知のとおりです。また，成田国際空港も近いので，感染症領域における千葉大学の役割は大きいと思います。また，同年同月には，企画情報部を設置することも出来ました。この目的は，病院運営における基本戦略及び経営改善についての立案並びに病院情報の収集と分析及び病院情報システムの開発・運用等を行うことでした。

同窓の方などから患者の紹介をしたくとも病院内のことが良く分からないというご意見がゐのはな同窓会等に寄せられたこともあり，附属病院各科の診療体制，専門，高度医療などを載せた冊子を発刊しました。第１回目は平成14年４月１日に配布しましたが，最近の冊子は大分充実してきているようです。開業された先生が大学へ患者を紹介した場合に，対応が必ずしも良くないというご意見を時に聞きます。これだけ大きな千葉県に医学部附属病院の本院が一つしかないということで気の緩みが有るのかもしれません。東京におけるように競争が激しくないことは有難いことですが，お山の大将的な考えは抱かないようにお願いしたいと思います。

やや寂しい感があったのが附属３学校の閉校でした。千葉大学医学部附属看護学校，同助産婦学校，同診療放射線技師学校の附属３学校は，平成13年度限りで閉校となり，平成14年３月８日に附属３学校の閉校式が記念講堂で挙行されました。附属３学校は，それぞれ輝かしい歴史を有し，多くの有為な人材を医療および教育を中心とする分野に輩出し，わが国の医療に貢献してきましたが，長年にわたる使命を終え閉校となった次第です。当日は磯野千葉大学長をはじめ多数のご来賓，卒業生など400名を超えるご臨席をいただきました。なお，記念すべき最後の卒業生として，看護学校37名，放射線技師学校25名，助産婦学校12名が目出度く卒業されました。また，これに関連して，閉校となった附属看護学校より附属病院にグランドピアノが寄贈されました。現在でも，外来ホールに置かれ，コンサートのときやBGM用に使用されているものと思います。

なお，平成15年４月１日には，院内保育施設（さつき保育園）の開設にこぎつけました。これは，旧看護学校寄宿舎の改修に伴うものでしたが，看護部の強い要望があり実現したものです。現在大いに役立っていると聞き嬉しく思います。

私は附属病院長の一時期，椎間板ヘルニアを患い自分もつらい思いをしましたが，周りの方々にも迷惑を掛けてしまったことは申し訳なく思っています。附属病院長の他に，日本不妊学会（現在の日本生殖医学会）理事長，およびアンドロロジー学会の理事長を務めていたのに活動が制限されたことは残念でした。大学関係者・学会関係者にも申し訳ないことをしてしまいました。後で分かったことですが，運動不足が椎間板ヘルニアを誘発するそうです。それで大学を辞する前後から運動を始め特にテニスをするようにしました。あの当時は，東京あるいは地方，さらには大学での会議の連続，通勤には自動車ということで全く運動をしていませんでした。確かに運動すると腰痛も治ることを実感しました。学生時代には一応は軟式テニス部員でしたので全くの初心者ではありませんでしたが，もともとの技術レベルは低かったので練習により上達は割合早

かったように思います。高齢でも少しずつ上手になることは嬉しいことです。ただし，軟式テニスと硬式テニスではバックハンドの打ち方が180度異なるので今でも戸惑っています。脱線してしまいますが，テニス界のことを少し勉強してみて興味あることに気付きました。フェデラーやナダルといった傑出したプレイヤーは人間的にも優れていることです。忙しい彼らが特に勉強をしているとは思われないのですが，敗者への配慮，社会貢献，優勝会見での哲学的ともいえる話など素晴らしいものがあります。絶え間ない努力が人間的な成長を促すのでしょうか。

千葉大学医学部附属病院は新棟も完成しました。これに関しては，文部科学省に何度もお願いに行ったことが思い出されます。また，他の部分の改築も進んでいるようです。附属病院は首都圏に位置し，千葉県の人口も日本の１／20強を占めるというように極めて有利な立地にあります。千葉県は人口当たりの医師数が全国でも特に少ない県であり，困難も多いかわりに，大学病院に対する期待も強いものがあります。地方の大学を卒業して故郷の千葉県に戻ることを希望する医師も多いと思われます。今後は特に，臨床日本一を目指して進んで頂きたいと思います。OBの目からもますます頼もしい，日本全国といわず世界から患者を引き付けられる病院になって頂きたいと考えます。

最後に，附属病院事務部に大変お世話になりました。轟木長紘事務部長（平成13年度），山田久仁夫事務部長（平成14年度）；藤原定夫総務課長，長塚正明管理課長（平成13年度），千葉正勝管理課長（平成14年度），山崎賢司医事課長；伊藤信幸総務課長補佐，川畑健志管理課長補佐（平成13年度），菱木一夫管理課長補佐（平成14年度），長牛義実医事課長補佐；渡邊栄人総務課総務係長，その他事務部の方々に御礼申し上げます。

看護部では，濱野孝子看護部長，赤井ユキ子副看護部長（総務担当），花島具子副看護部長（教育担当），吉田千文副看護部長（業務担当）をはじめ多くの方々のお世話になりました。また，院長秘書の戸村萬喜様には特にお世話様になりました。この場をお借りして感謝申し上げます。有難うございました。

（いとう　はるお）
（元附属病院長：平成13－15年）